

滋賀県立琵琶湖博物館協議会 平成30年度第2回会議次第

日 時 平成31年（2019年）2月28日（木）

13時10分～15時15分

場 所 琵琶湖博物館1階セミナー室

1 開 会

2 議 題

- (1) 平成30年度の博物館の運営状況について
- (2) 新琵琶湖博物館創造基本計画にかかる行動計画について
 - ①平成30年度取組結果について
 - ②トピック
 - ・海外研究機関との連携
 - ・ギャラリー展示「琵琶湖 漁具図鑑—魚つかみの道具のヒミツ—」
について
 - ・学校向けワークシートの作成について
- (3) 第3期リニューアルについて
- (4) その他

3 閉 会

《配付資料一覧》

- 資料1 平成30年度博物館の状況について(下半期)
- 資料2 新琵琶湖博物館創造基本計画にかかる行動計画
平成30年度取組結果
- 資料3 琵琶湖博物館第3期リニューアルの実施設計素案について
- 資料4 第3期リニューアルにかかる意見等について【回答】
- 資料5 平成30年度第1回琵琶湖博物館協議会での意見等について

〔13時10分 開会〕

1 開 会

○司会（副館長）：時間になりましたので、ただいまから滋賀県立琵琶湖博物館協議会、平成30年度第2回会議を開催させていただきます。

開会に当たりまして、館長の篠原がご挨拶申し上げます。

○館長：皆さん、こんにちは。

滋賀県立琵琶湖博物館協議会にお集りいただきまして、大変ありがとうございます。今回は30年度の2回目でございます。議題もたくさんありますけれども、何といたしまして、今はリニューアルの真っ最中で、第3期のリニューアルはどんなことをするかということで、またいろんなご意見をいただきたいと思っております。

いつも皆さんから厳しいご意見をいただいているんですけども、できることとできないことがあります。大体大きな予算を伴うことはできないことが多いんですが、それでも可能な限り、ご意見のほうを言っていただきまして、大変有意義な協議会だと思っておりますので、よろしくお願ひしたいと思っております。

今日は時間があれば、前回、「おとなのディスカバリー」を見ていただきましたけれども、「樹冠トレイル」は見ておられないようなので、雨も上がっていけば、見ていただきたい。「おとなのディスカバリー」も大変好評で、「樹冠トレイル」もそのようになるのだろうと思っております。ぜひ見ていただいて、いろいろなご意見をいただきたいと思っておりますので、よろしくご協議のほうお願ひしたいと思っております。

それでは、よろしくお願ひします。

○司会（副館長）：当協議会の定足数につきましては、委員の半数以上というふうになってございまして、本日は15人中、現在、12人のご出席をいただいておりますので、条例第9条2項の規定により、会議が成立しておりますことをご報告いたします。

それでは、議事のほうに移らせていただきます。

以降の議事進行につきましては、条例第9条3項の規定によりまして、会長が議長となることになってございまして、山西会長、よろしくお願ひいたします。

○会長：それでは、今回も引き続き、よろしくお願ひします。

限られた時間ですので、早速、議事に入らせていただきます。

2 議 題

(1) 平成30年度の博物館の運営状況について

○会長：まず、議題（１）平成３０年度の博物館の運営状況について、事務局から説明をお願いします。

○事務局：琵琶湖博物館企画調整課の芳賀と申します。よろしく願いいたします。

まずは、資料はあらかじめお配りさせていただいておりますので、全部は説明せずに、要点のみ紹介させていただきます。

そちらのほうについては、主に下半期に行われた行事や活動などを取り上げております。

まず来館者の状況です。

資料では２月１７日現在で、４２万３、６１３人となっておりますが、２月２７日時点では、４３万３、７２４人となりました。たった２週間で１万人増えているんですけども、第３日曜日に５、０００人という、ちょっと信じられないような数字が来まして、そのようになっております。昨年同期に比べると、現時点で、４万４、４５８人の増加となっております。

これらは第２期リニューアルの効果と見られます。８月以降、１０月を除いて、毎月１万人弱、去年より多く来ているというような状況があります。ふだん少ないということもあるんですが、特に、冬場の増加が著しいということです。このまま３月の来館者数が昨年と同じ場合は、年間の来館者数は４６万人に達するのではないかと考えております。この数字ですが、リニューアル直前の平成２４年に比べますと、１０万人の増加となります。

一方、リニューアルでは、最終的に５７万人に到達することを目標にしておりますので、そこに関して言うと、１１万人足りないということで、最終目標のところに向かって、今、半分のところまで来ているかなというのが実感ということになります。

それから、年間パスポートの会員数が１月末で９、９４０人となりました。この数字は昨年同期に比べますと、３０％増ということになっております。これは何度も利用していただくヘビーユーザーを念頭において発行されているものですので、これからも引き続き増やしていきたいというふうに考えております。

２番目以降は、主な行事に関してです。

まず、大きなこととしては、先ほど館長からのご挨拶にもありましたように、樹冠トレイルが第２期の最後のものとして、１１月の頭にオープンいたしました。秋の終わりのオープンでしたので、あまり使う人がいないのかなというところだったのですが、冬でも天気のいい日は結構な数の方が利用されています。１１月３日以降、カウントしてありますと、利用者数は樹冠トレイルだけで５万５、０００人が利用されているというこ

とです。これも冬の来館者の増加に寄与しているようです。

興味深い現象としまして、樹冠トレイルの前の湖岸のところに、ホワイトビーチという人工の湖岸があるんですけれども、ここで遊ぶ人が非常に増えております。そういったことで、湖岸へのつながりをつくるという役割を果たしているのではないかと思います。

また、今日の会議で聞いた話なんですが、実はレストランが樹冠トレイルオープン以降、利用される方が非常に増えているということで、そういった効果もあると聞いております。

次に、展示です。

前回、ごらんいただきました企画展は、入場者数としては最終的に、4万2,918人となりました。入館者数としては、少し期待より少なかったなということなんですけれども、ご覧いただいた方からは、深い内容で、見応えがあったという感想をいただいております。

また、日本植生史学会と共催で、公開シンポジウムを開催しております、今回の企画展はどちらかというと、学術的に寄った企画展になったかなと、内部では評価しております。

それから、次のページにギャラリー展が2つ載っているんですけれども、まず1つ目が、「トンボ100大作戦～滋賀のトンボを救え～」というものです。これは企業連携の一環で開催されておりました。これはビオトープを持っていたり、敷地内の生物保護に取り組んでいらっしゃる県内の企業さんが幾つもありまして、その方たちが自主的につくっている組織というのが、「生物多様性びわ湖ネットワーク」というものです。そこでは当館の学芸員もいろいろとお手伝いをさせていただいているんですけれども、その縁ということで展示をさせていただきました。

昨年、企業連携のところで、特定の企業だけやっていたいいのかなというお話があったと思うんですけれども、こういう形でいろんなところと連携するというのが今後も増えていくということになっております。

それから、もう一つは、これから行う展示ですけれども、3月23日、春休みから、漁具のコレクション展示があります。これにつきましては、後で行動計画のほうで少し紹介させていただきます。

少し飛びまして、交流の事業のところで、運用が始まった別館の状況が載っていますが、すみません、これ、数字がいくつか複雑な数え方をしてしまったので、統一がとれておりませんでしたので、ここでちょっと修正をさせていただきます。

まず、全体の利用実績は85団体でした。このうち、学校、幼稚園、保育園による利用が54団体になります。

この学校、幼稚園、保育園の54団体のうち、特別支援学校とか、支援が必要な学校・団体の利用が全部で15ありました。内訳としては、県内が11、県外が4ということになります。

それから、一般の介護施設による利用が20団体ありました。

残りがその他の行事や研修での利用で、11というふうになっております。

次の環境学習センター、それから資料の収集・整理・活用については、そこにありますとおりでしますので、割愛させていただきます。

次のページ、研究関連ですけれども、研究成果発信に関しては、そこにありますとおりであります。

少し注目をいただきたいと思いたすのが、新聞の連載を実は4紙、現在行っているということです。以前の協議会の中で、学術的な論文を書くとかも大事なんだけれども、一般市民にわかりやすい形で還元をということでご提案いただいておりますけれども、こういった形で新聞の連載というものを通じて、積極的に情報発信をしているところです。

それから、もう一つは、お手元に用意させていただきましたけれども、ブックレットの8巻・9巻が出ました。それから、以前お配りしました『琵琶湖はいつできた』というのがありましたけれども、大変な人気ということで、重版になりましたのでご報告させていただきます。

それから、海外機関との連携につきましては、韓国洛東江生物資源館との研究連携ということで、これも行動計画のところでも少し紹介させていただきたいと思いたす。

そして、広報・営業活動ですが、これにつきましては、寄附金を企業とか個人の方々からいただいておりますけれども、幅広い方からご支援をいただきまして、遂に寄附金の総額が1億円を超えることができましたので、報告させていただきます。

このほか、数字にならない行事は一覧でまとめ直したのが、その次のところに表として出ております。

下半期の総数は173件ということで、昨年とほぼ同程度の活動の状況であったということになります。

以上、短くはありますが、運営状況についての報告をさせていただきました。

○会長：ありがとうございます。

下半期、9月以降の活動について、かいつまんでご報告をいただきました。

議事次第にもありますように、(2)のほうで、海外研究機関との連携、ギャラリー展示、漁具図鑑、学校向けワークシート、これについては次の報告の後で詳しく紹介していただけるということですので、それ以外で、秋以降、皆さんのほうで参加された行事もあると思いますし、どんなことでも結構ですので、ご意見を出していただければというふうに思います。

○委員：レストランのほうが新聞に載っておりましたので、食べに来ました。地元の農業高校との連携ということで、やっぱり生徒たちも、自分たちのつくったものがこのように一般の消費者の口に直接入るということで、これからもまたいろんな連携があるのかなど楽しみにしております。

もう一つ、先ほど浜辺のことのお話が出ました。私は浜辺とか、向こうの森は行ったことがないんですけど、先日、精神障害者グループホームの方とお会いすることがあって、ちょっと肩が痛いねんという話をしていたら、クルミを持ってきてくれたんです。握るかたい実ですね。どうしたん言うたら、烏丸半島であったのでということでした。たわいのない話ですけど、そうした自然のものと自分の健康というのを、その方は健康志向の方ですけど、そういう視点で森というものを見てるんやなあということで、自分の健康とあわせて、そんなことがありましたということで報告させていただきます。

○会長：ありがとうございます。

感想ということでおっしゃっていただきました。

ほかにいかがでしょうか。

よろしいですか。

特にないようでしたら、次とあわせてまたディスカッションをしたいと思います。

(2) 新琵琶湖博物館創造基本計画にかかる行動計画について

○会長：では、次の(2)新琵琶湖博物館創造基本計画にかかる行動計画についてのご報告をお願いいたします。

○事務局：それでは、引き続きご報告させていただきます。

行動計画につきましても、事前にお送りさせていただいております。非常に多岐にわたりますので、逐一申し上げることはいたしません。

全体としては、目標達成が90～100%で、ほぼ達成という項目が多いことに気づかれたかと思います。ただ、その中でも疑問がおありになったりとかあるかと思います。あるいは、ちょっとこれは低いのではないかということで、疑問とかあるかもしれませんが、それらはまとめて質疑応答の中でお答えさせていただきたいと思います。

ここでは、3つほど、トピックを紹介させていただきたいと思います。

1つ目は、先ほど申し上げました洛東江生物資源館との研究の協力についてです。お手元には12月に行いました合同セミナーのレジュメ、要旨集をお出しさせていただいております。

前回の協議会を含めまして、これまでも報告してまいりましたように、当館は海外の研究機関との連携を進めて、これまで6つの機関と相互協力協定を結んでおります。

アジアに関しましては、韓国の洛東江生物資源館、それから中国の水生生物研究所と一緒に、東アジアの生物等について明らかにしていこうというようなことで、それを行動計画の中では7番目のところ、「『湖と人間』の関係を考える研究の推進」の「東アジアにおける琵琶湖淀川水系」というところで掲げさせていただいております。

洛東江生物資源館とは2年前に相互協力協定を結びましてから、毎年、お互いのところを行ったり来たりしながら、合同セミナーを行っております。互いの研究内容について理解を深めるとともに、それらの中から共同でできる研究はないかということのすり合わせを行っているところです。

今回は、琵琶湖博物館で、9月に一旦こちらから学芸員が参りまして、打ち合わせを行ってまいりました。12月にこちらで合同セミナーを開いたわけです。この合同セミナーに当たっては、日本学術振興会の補助をいただいております。

要旨集のほうは、またお読みいただければ、いろいろ出ているんですけども、その中で成果としましては、まず魚の比較研究を始めましょうということで、話がまとまりつつあります。

要旨集でいきますと、1番目にお話しをしているキム・サンギさんが東アジアの魚の進化の研究をやっております。韓半島から中国、モンゴルにかけて、コイ科の魚がどのように進化したかということをやっているんですけども、こちらとしては田畑学芸技師がカウンターパートになりまして、両者で進化の過程をやっていこうという話がまとまりつつあります。

それから、ことしの夏には、「ピワマス」の企画展を当館は予定しておりますけれども、これにつきましても、資料の提供とか、そういう形で全面的にご協力をいただけるということになりました。

来年度の合同セミナーは韓国のほうで実施いたしますので、今その日程の調整をしているところです。

簡単であります、このような感じで進んでおります。

それから、2つ目ですけども、これは先ほど紹介しました漁具のギャラリー展です。

これは行動計画で言いますと、6番の「資料を利用しやすい博物館への進化」の一つに入っていますけれども、これは琵琶湖の漁撈用具が国の有形登録文化財になったということで、お披露目をいたしますという約束をさせていただいておりました。どういう企画展になるかという企画展の開催案とレイアウト図のほうをお手元に用意させていただいております。ポイントとしましては、単なる物の列品ではなくて、その背後にあるさまざまな知恵や歴史といった物語を提示することで、楽しんでいただこうという趣向になっております。

先ほど紹介させていただきました新聞4紙に連載をしていますけれども、そのうちの 하나가、担当者である渡部が京都新聞で書いております「漁具図鑑」というものになります。展示の中ではこの「漁具図鑑」に連載したのも一緒に展示するということになっております。

3つ目です。これは大項目の2番目、「交流空間・交流機能」の「学校向けのプログラムの充実」というところに当たります。

これにつきましては、この会議でも先生方を中心に大変興味を持たれて、どんどん作るようにというふうにご提案いただいていたものなんですけれども、かなり紆余曲折を経ました。それがようやく形になってきました。できたものをぱっと見ていただいて、これはどうだというのをやってもおもしろくありませんので、せつかくですので、その紆余曲折の過程とか、その辺をちょっとお話しさせていただきたいなと思ひまして、制作に至るプロセス、それからいろんな考え方について、短いプレゼンをこれから行いまして、ご議論いただきたいというふうに考えております。

それでは、交流をつくった先生方のほうからプレゼンをさせていただきます。

○事務局：交流係長の八尋です。

琵琶湖博物館では、博物館に来館しようとしている学校の先生方の肥やしとなるようなものとして、先生方のガイドを作成してきました。今回はその経緯とか、どういうふうな考えでやってきたのかということをご説明したいと思っています。

○事務局：そうしましたら、交流係の小林と奥野のほうで、学校向け、教員向け展示見学ガイドとサポートシートの開発について、お話しさせてもらいたいと思います。

まず、この内容につきましては、開発に至る経緯と、それから教員向け展示見学ガイドの開発とサポートシートの開発について、どのように行ったのか。それから、今後、実際にそれを学校・団体の先生方にどのように提示していくのかということを検討しているという、そういう部分についてお話しさせてもらいたいと思います。

まず、教員向けガイドとサポートシートの開発なんですけれども、至った経緯なんですけれ

ども、やっぱりリニューアルをして、展示が変わったところがあるので、「どのような展示になったんですか」とか、「ワークシートは新しくなってないんですか」というような問い合わせがあったということと、それから教員が博物館に児童生徒を連れてくるに当たって、教員の展示物に対する意味合いの理解不足ゆえに、子どもたちに実際に課題を与えるときに悩まれたり、課題を作成するときに時間不足であったりという、そういう諸問題があるんですが、それを解消するために、先生方の力になるようなガイド、サポートシートが必要ではないかという点。最後は、リニューアルに伴う従来品、今も過去2012年度につくったものがホームページ上にあるんですが、その改善、または新規作成という、館内での要望ということもありまして、これを行っています。

教員向けガイドにつきましては、今回は先生方に展示室を知ってもらって、子どもたちに課題を与えやすくするために、「キーワード」という形で博物館の展示を教師がキーワードとして捉えて、その捉えるときに、「社会科」「理科」「環境」という3つの観点で子どもたちに課題を与えられるようなものにキーワードを絞りました。

分量的にはA4判の13ページという形で、展示の写真と解説をつけながら、提示をしてあります。先生方が事前に琵琶湖博物館の展示ってこうなんやと。それを子どもたちにこういうふうにして課題を与えようというのをスムーズに行えるように、PDFをつかって、試作段階ではあるんですが、そういうお困りの先生方に、問い合わせがあればメールでも配信できるようにはしてあります。

「キーワード」ですけれども、A展示室とB展示室につきましては、今後、第3期のリニューアルで変わっていきますので、またこの部分につきましては、5カ年計画の中で変えていって、新しい展示室になった段階で変わっていくというような部分なんです。C展示室と水族展示室につきましては、リニューアル1期・2期を終えていますので、このような部分で先生方には提示をしてあります。

どのようなものかということで、実際に作品をつかって先生方にお渡しするという形なんです。要はガイドの特徴としましては、展示室の写真とその意味合いをコメントで紹介しながら、下線部で見どころとか、注目すべきところとか、このような課題を与えたらどうですかというような文言を入れてあります。なので、実際に先生方が、この展示はこういう意味合いでつくられているんだということを理解しながら、それを踏まえて子どもたちに課題を与えるというようなことをしやすくしてあります。具体的にはこのような形で書いていたりもしています。

実際に、13ページという形で、どのページも写真に対して文言で、シンプルで、かつ短く、先生方がそこから考えていくという形にしてあります。なので、A展示室から

水族展示室まで、それぞれについてキーワードをこういう形で、展示、写真、文章にすることで、満遍なくどの学校のどの学年、どの講習で訪れても活用できるようにはしてあります。

それから、サポートシートにつきましては、一応小学生であっても、中学生、高校生であっても、ビギナー用として、初めて訪れた児童生徒さん方が活用できるような、そういうところをイメージしながら、リニューアルをしたC展示室と、「そらびわ」と、水族展示室についてつくりました。

クイズ形式とか、クイズラリーとか、一問一答形式というのが他の博物館、科学館で非常に多いワークシートなんですけど、子どもたちに感想を書かせたり、スケッチをさせたりというような幅広く、バリエーションに富んだワークシートにししながら、1枚15分～20分程度でつくったつもりです。

これは昨年度の試作品なんですけど、あまりにもごちゃごちゃしていてわかりにくいというご指摘も、2017年度も実はこういう取組をしながら改善をしてきて、2018年度はそれをこのような形で、ちょっとシンプルにC展示室と水族展示室をまとめてあります。それぞれのC展示室も6個の項目について1つずつ、水族展示室は3つという形にしてあります。なので、形的にはこんな形になります。見やすく、わかりやすく、どの部分に行っても同じような形式で、いろんな形で書けるようなもの。これはPDFで用意していますので、先生方が必要な部分を切り取ってワークシートをつくれったり、逆に編集したりできるようにはしてあります。全てつくったものをお見せしますと、ぱっと見たら、どのワークシートも同じような、どこにあるのか、どういうふうなものがあるのか、どこに行けばいいのか、そういうあたりで作品をつくりました。

マイクロアクアリウムにつきましては、ビンゴ形式でちょっと楽しめるような形にもしてあります。

そのつくらせてもらったものを、実際に研究しながら、改善しながらなので、先生方に教員研修で使ってもらいました。滋賀の環境教育研究協議会という研修会で、120人の県内の先生方にガイドとサポートシートを大体45分間で60名ずつやって、実際にその感想なりのアンケートをとったという形です。それをもとに今後、修正改善という形になります。アンケートはA4用紙の裏表という形で、このような形でしました。実際に先生方が集まって、取組について説明を受けて、その後、自分たちでシートを2枚ほど選んで展示室に行くという研修です。先生方が実際にそのワークシートをやっておられたり、タッチパネルを使って調べて、ワークシートをやっていたり、ガイドを見ながら、どのような課題が考えられるかなということを考えていただいたりしました。

質問の中で、これは活用性が高いキーワードとか、展示室のどの場所なのかというのをちょっと聞いてみたかったので、細かくチェックを入れてもらいました。

小学校の先生にアンケートをしますと、こちらも見見だったんですが、やはり社会科の3年生の「昔の暮らし」ということで、昔の道具に関する展示であるとか、生き物コレクションであるとか、田んぼ、ヨシ原、こういったあたりで活用性が高いと考えておられる先生が多かったです。

中学校の場合は変わります。古代湖であったり、生き物コレクションであったり、プランクトンの部分、そういったあたりでの活用性が高いということを教えていただきました。

サポートシートにつきましても、先ほどと大体同じです。田んぼとか生き物、富江家の部分、ヨシ原について、こういうあたりを使おうかなと考えておられる先生方が多かったです。

中学校もプランクトンであるとか、固有種、ヨシ原について、こういうあたりで考えておられるところが多かったです。

ですので、小学校と中学校で使う場所についてはちょっと異なりがあるんですけども、生き物コレクションであったり、ヨシ原は小・中共通で活用性が高い部分になりました。

もう一つは、こちらが意図をしています先生方が子どもたちに課題を与えるといった部分で、この2つの四角で囲まれた部分、ガイドとサポートシートについて、児童生徒の見学時に、実際にそれがあれば課題を与えられそうだと、どうですかねというようなところで答えていただいたのが、この結果になります。青の部分と赤の部分で足し算すると、80%ぐらいですね。4・3・2・1という評価の中で、80%以上の先生方がこれは使えると。中学校はちょっと下がるんですが、どちらかというと、中学校はそのまま使いたいという部分もあるのかなというのは感じましたね。なので、児童生徒への見学時の課題は与えられそうだとところで、80%の先生方がガイドとサポートシートの必要性という形で、あったら助かるという形になりました。

入手方法とかも聞いてみたんですが、今のこの状況でいきますと、ホームページに掲載されていると、いつでもダウンロードできるしというところを望んでいるみたいですね。

まとめになるんですが、先生方の事前学習用、子どもたちが課題を考える肥やしになるようなもの、作成する時間がなければ、先生方にそれをそのまま使ってもらえるようなもの。短時間で効率よく見学するために、有効な手段なのではないかということがわ

かってきています。

今後、利用団体への提供の仕方は、今後考えていく必要があるということになっています。

○事務局 では、ここから代わって、奥野のほうが話をさせていただきます。

先ほど小林のほうからありました滋賀の環境教育研究協議会のアンケートなんですが、こちらは県の教育委員会とも共催していますので、そちらのほうでとっていただいたアンケートになります。

研修に関してはどの先生方も、よかったということでアンケートに答えていただいているんですが、その中の言葉の中に、どのような視点でワークシートを作成すればよいか考えられたというような意見をいただいています。これは実は研修の中で、私たちが提案するワークシートもあるけれど、先生方も作り出してほしいんですという意味ももちろん込めて伝えています。ですので、このガイドを見たり、ワークシートをたたき台にした上で、自分たちでもワークシートをつくるには、こうしたいいんだなということがわかったというような意見をいただけたのは、非常にうれしかったです。こちらの意図していたところと、先生が思っていたところが合致したというふうに思っております。

もう一つなんですが、今、学校現場、県内でも小学校の先生は非常に若手が増えております。博物館にほとんど来たことがないとか、実は内容をあまりよく知らないということで、今、琵琶湖博物館では初任者の研修もやらせていただいているんですが、その中でも先生方に実際に来ていただいて、ワークシートをつくるという体験をしてもらっています。それはこちらでもワークシートを提供するんですが、どうしても学校というのは形があると、そちらに頼ってしまうというところがあります。ですが、博物館が展示しているものと、学校教育が求めているものが、全てが全て合致するものではないということを理解してもらった上で、やっぱり子どもの実態であるとか、先生方の目的に合わせたワークシートづくりというのも大切なんですよということも、あわせて研修で行っています。そういった研修の中で先生方は一生懸命、仲間と交流しながら、自分たちのクラスであれば、こんなものがつくれそうだなということで研修をしていただいている様子です。

実際に先生方は、自分たちがつくったものを発表し合いながら、ここでもすごくいいものをつくり出しておられますので、博物館が提供するものに合わせて、自分たちでもこういったワークシートづくりということを忘れないでほしいという思いも込めて、こういことをやらせていただいています。実際、これは先生方がつくられたシートになり

ます。

こういったワークシートづくりの中で、ガイドを作ったり、シートを作る中で、先生方の力量、技能も高めていっていただくということも併せて考えている最中になっています。

以上になります。

○事務局：行動計画に関しましての報告は以上とさせていただきます。

○会長：ありがとうございます。

トピックを含めてご紹介をいただきました。

皆さんからの意見をお聞きしたいと思います。

○委員：小学校のほうで校長をしています。

今の教員向けのサポートシートの件で、大変ありがたいなと思っています。バス代が3年ほど前からかなり上がったので、外へ出る機会というのがめっきり減ったというのが学校の現状です。短い時間でやっぱり体験もさせたいという思いがいっぱいあるので、何とか思うんですけども、なかなか先生方自身がこういう体験をしていないとか、そういう現状があると、そういう魅力がなかなか子どもにも伝わりにくいというところがありますので、今回提案していただいたようなガイドなどがあると、大変助かるというところでは。

さらに言えば、することがどんどん増えてきているという学校の現状がありまして、じっくり見ていられない現状があるという、ちょっと情けない現状なんですけれども、その点で大きなスペースと、文字とか写真とか入れていただいていることは大変ありがたいなと思いますし、初任者研修ともタイアップしてやっていただいている、若い先生が体験する場をつくっていただいているというのは、大変いいことだと思いますので、ぜひともこれを学校に周知するような効果的な方法、そちらのほうをお願いしたいなというふうなことを思うところです。

○会長：大変ありがたいという小学校のほうからのお話をいただきました。

中学校のほうはいかがですか。

○委員：何年前に大きなブックレットでつくっていただいたときも、大変感動的に、どの部分をピックアップして、子どもたちの学習課題にしていこうとか、著作権の問題がどうなるかと思いながら、コピーしながらやったことがあります。今プレゼンいただきましたように、PDFにして、それぞれ学校のほうへ持ち帰って、もしくは送っていただいて、さらに加工までして、そのカリキュラムに合わせながら、子どもたちの課題を学校のオリジナル、現状に合わせて、教科であるとか、総合的な学習の中身で使わ

せていただくことは非常にありがたいと思います。ぜひいろんな場で、こういうことが可能になるということを伝えていけるようお願いしたいと思います。中学校の理科部会等でも随分いただきましたから、これから先も広めていきたいと思っています。

それから、質問ですけれども、協議会の120名の方は、教科で言うと、ポイントは理科、社会という、そんな話ですが、集まれた方がどのような教科であったかとか、年齢層は若かったという話。出てきた数字がどういう有効性があるかなというふうに思いながら、ちょっとその2つのお返事をいただければと思います。ぜひこのワークシートの中身が、さらに進化しますように。できたら、またつくったものをこちらに、こういうふうなつくり方をしたんだけど、いかがだろうと。お互い交流しながら、博物館のほうにも相談しながら、またさらにバージョンアップしたものができ上がっていくと、とてもよいと思います。

以上です。

○会長：ありがとうございます。

どうぞ、事務局のほう。

○事務局：ありがとうございます。

滋賀の環境教育研究協議会は8月3日の夏休みだったんですが、小学校の先生、中学校の先生、基本的には環境教育担当という形で、学校内で設置された校務分掌上、環境教育の主任の先生方が多数来られていますが、都合が悪ければ、かわりに教頭先生が来られたりもしています。

教科的な部分で言いますと、中学校につきましては、環境教育主任は理科の教諭が兼ねていることが多いですので、7割ぐらいは理科の教師。残り3割は社会、英語、国語等になってきます。小学校の環境教育主任といいましても、小学校のほうで理科を専門に研究をしている教諭というのが非常に少なく、2割程度。残りはほかの教科を専門にされている先生方が多いという現状になっていますので、環境教育担当という形なんです。皆さんが専門家ではない。環境教育を主に研究をされている先生方ではないという現状です。

あと、補足なんです。年齢的にも、先ほど奥野も言っていました。この研修会に参加されていた先生方は、採用されて5、6年程度の先生と、逆に20年、30年ぐらいの年齢で、中間層の世代がなかなかそこには来られていなかったという現状になっています。

以上です。

○会長：よろしいですか。

○委員：はい。

○会長：これから実際に活用してもらおう中で、さらにまたブラッシュアップを図っていただきたいというふうに思います。

○委員：ちょっと教えていただきたいんですけど、このワークシートをつくられて、既にこれは実施されているということなんですか。これで子どもたちが実際に書いたりしているんですか。まだこれからですか。これまではこういうのはやっていらっしやらなかったんですか。

○事務局：従来、博物館にサポートシートという形でホームページに上げて、それを子どもたちが使うというのを、2012年度以降、活用はしていましたので、子どもたちは使っていましたし、先生方もホームページを見れば、サポートシートがあるというものはご存じでした。

今回、私がお話しさせてもらったものについては、研修会で使っていたという形がまず1つと、私自身は研究の中で、中学校、高等学校の訪れる先生方に、こんなものをつくってみたんですけど、どうですかと、個別の研究協力という形で、実際にお渡しして、小学校も含めてそうなんですけど、お試して実際に使っていて、子どもたちの反応はどうだったかという情報も戻ってきています。

以上です。

○委員：多分、子どもたちって、勉強に来るので、遊びに来るわけじゃないから、ここに来て勉強されると思うんですけど、あまり難しかったり、つまらなかったりすると、結局、琵琶湖を知ってもらおうとか、昔の生活を知ってもらおうということが無駄になってしまうこともあると思うので、この辺のテストのやり方というか、答えの導き方というのは、ある程度簡単でない。皆さん、点数的には大体100点ぐらい、それとも50～60点ぐらいなんですか、これまでやった中では。小学校とか中学校でどうなんですか。

○委員：大体正解できるようになっています。

○委員：これが難し過ぎたり、あまりにも先生たちの目線だけでいってしまうとだめなので、子どもたちがここへ来て、琵琶湖は嫌だと思わないような形にするとか、琵琶湖を好きになってもらうような形のワークシートにしないと、意味がないんじゃないかなと第三者的に感じますので、その辺をもうちょっと留意して、これはちゃんとしているぞという形になっているのかということところです。

○委員：新しい学習指導要領の中にも謳われているわけですけども、探求心とか、学びそのものについて、子どもたちが力をつけていくということから考えると、前も非常によくできていたと思うんですが、簡単にぱっぱぱつと埋め込み式で、答えが導き出せる

ところも大事ですし、あとはより発展的にと前は言ったんですけど、探求心をあおりながら、どこまでが答えなんだろうとか、残念ながら時間切れだけれども、もう一回来て見つけたいという気持ちを持つことがすごく大事なところですよ。

この施設は前もそういうふうにお伝えさせてもらったんですけども、何度来てもまだ見切れないところと、それから自分自身の知的好奇心をどんどんあおることが続いていく施設であってほしいと。ですから、ただ単にワークシートができて、この中に答えがあって、ああ満足だと、そういう博物館ではないと思っています。

○委員：そうですね。だから、言いたいのは、博物館に来たいと思い、次も来たいなど。今回は学校で来たんだけど、次は家族で来ようとか、おじいちゃん、おばあちゃんとか、そういうふうに思わせるような形にしないと、残念な結果になっちゃうんじゃないかなというところなので、その辺も考えていただきたいなど。せっかくの機会、みんなで集まって来てやるのであればということです。

○会長：おっしゃるとおりですね。

○委員：加えて言いますと、前にも言いましたように、総合的な学習としては、ここに来て、バリアフリーとはこういうものなんだということを知ったり、いろいろ担当者の方が示したこととか、それから例えば、私は安曇川出身ですが、エリ漁のことが出ていたり、地元の方がこういうふうに出ているシーンなんか、非常に愛着が持てて、地元愛が出ているところを本当に興味を示して見ている子どもたちの姿があったことも記憶にあるところです。ありがとうございます。

○会長：貴重なご意見、どうもありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。

○委員：今、このワークシートを見せていただいている、富江家についての答えを見ていたら、1番のところに、この場所は魚が泳いでいるよということで、名前が「かわや」と出ているんですね。私の知っているのでは、「かばた」と言ったり、「かわと」と言ったり、地域によって呼び方は違うと思うんです、滋賀県の中で。そして、私の知っている「かわや」というのは、漢字で書いたらわかるんですけど、単に耳で「かわや」と聞くと、おトイレのことを思います。そういうふうに、答えが1つだけしか書いてないんですけど、地域によっていろんな呼び方があるので、そこをもう少し考えていただけませんかという、それだけなんですけど、ごめんなさい。

○会長：個別のご指摘になりますけども。

○委員：すみません、細かいところで。

○会長：どうぞ。

- 委員：これなんですけど、「マゴイ」という標準和名の魚はおりません。「コイ」です。
- 会長：「マゴイ」と書いてあるということなんですけど。
- 委員：それと、答えに、「ひれの数が違う」と書いてあるのは、「ひれ」の数って、「ひれ」は何を指すのかわからない。
- 会長：そこら辺の専門的なチェックはどういうふうに行われているんですか。
- 委員：これ、「あぶらびれ」なんです。だから、そこを書けばいい。「ひれ」の数が違うって、「ひれ」って鰭条（きじょう）を指すのか、ひれ自体を指すのかわかりませんので、やっぱり情報は正確に。
- 委員：それで覚えてもらおうと困りますからね。
- 委員：そうなんです。子どもに間違った知識を与えたらいけない。
- 会長：事務局、どうぞ。
- 事務局：ご指摘のとおりだと思いますし、専門家によるチェックという部分で、ちょっと怠っている部分がございますので、今後、そういう部分も含めまして、また次年度以降、改善・修繕という形で、正式なものに、いいものにします。今いただいた意見をもとにしながら、必ず修正をしていきますので、よろしくお願ひします。
- 委員：それと、もう一つ、「ビワコガタスジシマドジョウ」というのは、最近、姿をほとんど見ない。ですから、「絶滅危惧」の言葉を入れてもいいんじゃないかなという気もするんですけど。写真を撮ろうと思っても、入手できないんですよ。固定標本しか写真が残っていませんので、そういうこともちょっと入れておけば、一部、レッドデータに載るものがあるということで、警鐘を鳴らす意味があつて、いいんじゃないかと思うんですけど。
- 会長：ひょっとしたら、ほかにもあるかもわかりませんので、また中でのチェックをよろしくお願ひしたいと思ひます。
- 委員：すみません、細かいことなんですけど。
- 委員：でも、大事ですよ。
- 会長：お願ひします。
- 委員：ワークシートのほうを今拝見させていただきまして、すごくおもしろいなと思つたのと、これは一応今、学校向けのワークシートという形でお話しいただいているんですけども、一般の親子とかで来られた方に配布をされる予定がないのかというのをお聞きしたかったんですが、実は私自身も小学校2年生の男の子の母親なんですけど、琵琶湖博物館が大好きになりまして、おとなのディスカバリーにはまってしまって、今日も絶対パスポートを更新してきてって言われて来ているんです。

すごくうれしいなと思う反面、全体を回る働きかけがなくなってしまって、とにかくそこで色を塗りたいという子がすごくたくさんいるんですね。お母さんたちと話しても、子どもは生き物がすごく好きなんだけど、子どもの知識欲に母親が追いついていけないという話がありまして、例えば子どもが回答するのに、多分まだわからない言葉が多いので、母親と一緒にこのシートを持ってついていって、一緒に話をしあげたりとか、一緒に読むことで、お母さんとかお父さんが琵琶湖のことを知るきっかけにもなると思いますし、例えば5、6種類あるのであれば、今日はこのシートをやってみようかというのと、多分、動線とか、じっくり見たい視点が変わってくると思うんですね。そうすると、やっぱりパスポートを持っているならではの楽しみ方というか、今日は、水族展示をじっくり見てみようとか、今日は富江家をゆっくり見てみようというような、博物館の利用促進にもつながっていくと思いますので、ぜひこれができたら、低学年の子どもさん、まだ本当に自分では読み切れないけれども、知識がすごく欲しいという子どもたちが、家族や一緒に来てくださる方と一緒に、琵琶湖博物館全体を回れるようなシートとしても、ぜひ育てていただけたらなというふうに思って、期待をしています。

○会長：という要望ですけども、いかがでしょうか。

○事務局：従来からホームページに上がっていますワークシートもそうなんですけど、一般の団体、それから家族からの問い合わせ等もございまして、学校だけじゃないという形でお答えはさせてもらっています。今現在もホームページに上がっているサポートシートにつきましては、例えば子ども会で訪れる団体、それから家族連れで来られる家族がご利用いただけるようにはなっていますので、その形は継承していきたいと考えております。ありがとうございます。

○会長：館内に来られたときに、そういうのがあるよという、そういう誘導といいますか、案内もされているんですか。

○事務局：今現在、そういうふうな案内というのはしてないですね。学校・団体向けというふうな形でさせてもらっていますので、問い合わせがあればという形で、子ども会と一般団体につきましても、問い合わせがあったら、ご紹介させていただくという形にしています。

○会長：どうぞ。

○委員：例えばなんですけど、館内を歩いて、それを全部答え合わせをしたくなると思うんです。例えば、ディスカバリールームの壁とかに張っておいてもらったら、帰りにあそこに寄って答え合わせしようねとか、そういうこともできると思いますし、博物館学芸員の方の負担を増やさずに、来た人たちが自主的に楽しんで、知識を得て帰ってくれ

るというようなシステムとして、このシートはすごく使えるんじゃないかと思うので、ぜひご検討いただけたらと思います。

○会長：せっかくなつくた資源ですので、ぜひいろんな方法で活用できるように考えていただきたいと思います。

どうぞ。

○委員：いらっしゃる方が全てホームページをチェックされて来られるわけではないので、エリアごとだったりとか、受付あたりに、印刷物を置いておかれたほうがいいのかなど思いました。

○会長：よろしくをお願いします。

ほかにいかがでしょうか。

洛東江資源館との連携事業とかにつきましては、何かコメントございませんか。

○委員：洛東江資源館と琵琶湖はかなり密接な関係がありますし、進化と単に書いていますけども、対象は魚類学的なことですから、どんな方法でお進めになるのかということですね。

それと、これではわからないんですけども、採集された標本ですが、ぜひ琵琶博と洛東江と共有されるものを置かれることがいいかなと思います。それは向こう側も一緒に、琵琶湖の魚類標本を韓国の資源館に置くということですね。韓国は最近、標本については、海のほうも建てていますし、淡水魚のほうは漢江（ハンガン）の近くにもあるんですよね。あそこは地質は違うんですけども、ちょっと触手を伸ばされて、漢江のほうとも交流されたらどうかなということは思います。本当に韓半島は黄海沿岸と対馬海峡の沿岸はちょっと魚類相も違いますし、質が違うんですけども、向こう側の黄海沿岸のほうも視野に入れないと、歴史がわからない。

もう一つ言うと、日本海沿岸もあるんですけども、あそこも視野に入れて考察されたらどうかなと思います。単に韓半島と琵琶湖ということだけでは単純過ぎて、伸びないんじゃないかなという気がします。

すみません、専門的なことばかり言いまして。

○会長：ありがとうございます。

いかがでしょうか、何かありましたら。

○事務局：韓国の洛東江との国際交流を担当しています亀田と申します。

今、委員がおっしゃっていただいたとおり、淡水魚の資料につきましては、既に一部、韓国のほうのキム・サンギさんという研究者と、うちの田畑のほうで、幾つかの資料の交換というのをしております。今後ともそれぞれ採集したサンプルについては、相互

に資料の交換というのを進めていこうということも考えております。

また、研究対象となる地域についても、韓半島と日本だけではなくということは、もちろんそのとおりでして、今回のキム・サンギさんの研究発表でも、もう少し大陸のほうのロシアですとか、中国ですとか、そちらのほうとサンプルとも比較しながらの研究というのもされておりますので、私たちの思いとしては、東アジア地域の淡水生物の系統・進化を見ていくという、もう少し広い視野において、韓国と日本との比較というのが非常に重要なのではないかというような視点で、これから研究を進めていきたいと思っています。

また、もう一つの魚ではなくて、エビ類の研究のほうも、向こうの方が日本に來られて、サンプリングとかのお手伝いもしていただきまして、それについてもやはり、琵琶湖だけではなくて、日本海とか太平洋岸にもサンプルをとりに行ったりということで、もう少し幅広く研究対象というようなものを捉えながら、共同研究を進めていきたいと考えています。ありがとうございます。

○委員：1つ、大きな島が抜けていますね。台湾です。台湾は昔、大陸とつながっていたんですけども、台湾の高地、昔、新高山と言ったんですけど、「タイワンマス」というのがあるんです。あれは「ビワマス」とも関係がありますし、結構大事なことで、そういうところも視野に入れないと、中国大陸は広過ぎますから、もう少し限定されて絞られたほうが良いと思います。朝鮮半島も東海岸のほうにヤマメ——「サンチョノ」と言いますが——があるので、何かに焦点を絞っていかないと、中国大陸を視野に入れてしまうと、とてつもなく広いので、それこそ東南アジアのほうに行ってしまうんですね。私なら、多分やらない。

○事務局：サケ・マスの関係につきましては、来年度の企画展のほうで、「タイワンマス」も含めて展示で紹介していく予定になっておりますので、その辺も進めていければと思います。ありがとうございます。

○会長：貴重なご意見を受けとめていただきたいと思います。

ほかにいかがでしょうか。

お願いします。

○委員：ど素人ですので、これを見せていただいて、すごいなとしか言えないんですが、ただ私たちがぱっと見て、地理的な位置がわかりません。後ろ、真っ白ですので、せめてそこに白地図でも結構ですので、関係する場所、そういうのが入っていたら、その関係者だけでなく、ほかの方たちにもわかりやすいんじゃないかという、ど素人の考えです。お願いします。

○委員：これ、大事なことだと思いますね。地図がないと、理解できないですよ。洛東江がどこにあるかということも恐らくご存じないし、漢江がどこにあるかということもご存じないし……。

○委員：大まかな白地図でも。

○会長：今後に活かしていただければというふうに思います。

○委員：必ず瀬戸内海を入れておかれることですね。

○事務局：ありがとうございます。

おっしゃるとおりでして、そちらのほうの今回の要旨については、やはり研究者同士でまずやるということの視点でつくってしまったというところはあるんですが、こういういい研究を進めていった中で成果があったら、今度は県民の方、あるいは一般の方に向けて、そういう報告会みたいなものを将来的には開いて、皆さんに還元していきたいというふうに考えています。そのときにはちゃんと地図も入れながら、わかりやすく、そういったものをつくりたいというふうに思っております。

○会長：ぜひお願いします。

あと、漁具のギャラリー展がもう一つのトピックスとしてご紹介がありまして、これは3月23日からの予定ということで、今こういうプランで進められているということです。もし今のうちにご意見とかありましたら、この場でお出しただけだと思います。

また後ほどでも結構です。

それ以外でも結構ですので、何かこれまでの議題（1）と議題（2）にわたって、ご意見とかありましたら、承りたいと思います。

よろしいですか。

（3）第3期リニューアルについて

○会長：そしたら、後半は（3）第3期リニューアルの話になりますが、事務局から説明をお願いします。

○事務局：新琵琶湖博物館創造室の梅村でございます。よろしく願いいたします。

それでは、第3期リニューアルについてご説明させていただきます。

資料3をごらんください。

全体事業費約29億円のうち、第3期は約7.5億円を計画額とさせていただいております。

琵琶湖400万年の生い立ちを紹介するA展示室及び人々が琵琶湖周辺に暮らすよう

になった縄文時代から近世を紹介するB展示室を対象としております。今年度を実施設計を行いまして、平成31年度に施工、これは(3)をごらんください。

今年の7月から展示工事を予定しております、閉室期間は今年の11月末ごろから。来年の7月にオープンを予定しているものでございます。

新しい展示では、「湖と人間」の未来を考える展示となり、琵琶湖の過去から、いま、そして未来を考える多様な視点を提示いたします。

新展示の特徴といたしましては、「体験」「参加」をキーワードに、子どもから大人までが楽しめ、交流の場の増加により、学びと発見に満ちた発信力の高い展示といたします。

各展示室の内容につきまして、それぞれの主担当から説明させていただきます。

○事務局：A展示室担当の里口です。よろしくお願いします。

資料の3ページ目がA展示室の展示案となっております。

皆さん、ご存じのとおり、琵琶湖博物館は「湖と人間」というテーマでやっています。「湖と人間」のこれからを考えるための展示ということで、C展示室と水族展示に関してはリニューアルしているんですけども、今度はA展示室、B展示室ということで、人間の暮らしの時間よりももっと長い過去を扱うということになっています。

B展示室は人間の歴史ですけども、A展示室についてはそれよりももっと長い、琵琶湖そのものの生い立ちを扱いますので、400万年という時間の中でどういうふうに環境ができてきて、現在の環境ができるまでにどういう変化があったのかというようなことを扱う展示室ということになります。

「湖と人間」ということがテーマですから、それを来館された方が、自然の変化ということ、琵琶湖の生い立ちということと自分には関係があるんだということを考えていただく、意識していただくというような展示というのが求められているんだと思っています。

そういうことから、A展示室、400万年という琵琶湖の生い立ちを扱うんですけども、何を一番知っていただいたらいいのかなということ考えたときに、自然環境、琵琶湖そのものが変化してできてきたものなんだよ、ものすごい長い時間がかかって、今の自然がつくられたんだというようなことを知っていただくことで、自分どものすごい長い時間というもののかかわりというようなことを少し意識してもらえたら、A展示室は成功なんじゃないかなというようなことを考えています。ですから、起点としては、現在の環境なんですけども、そこから過去へ遡っていくような形で、いろんな自然環境の変化ということを紹介しようというふうに考えています。

文字よりも図を見ていただいたほうがわかりやすいと思いますので、A3判の鳥瞰図と、その次に平面図というような形で、A展示室の図は2枚ご用意させていただいております。

鳥瞰図のほうがわかりやすいなという方は鳥瞰図を見ていただいて、平面図のほうがわかりやすいなという方は平面図を見ていただいたらいいかと思います。

この鳥瞰図は展示業者さんにつくっていただいたんですけども、なぜかものすごい展示物がなくて、すかすかの感じに見えるんですけども、実際に展示室ができ上がったら、もうちょっといろんなものがあるなというような感じになるというふうに想像しております。

私はいつも平面図をよく見ているので、平面図で説明させていただきます。

A展示室は琵琶湖博物館のエスカレーターを上がって、一番初めの展示室ということになります。

A展示室、図の左下のところが、エスカレーターを上がって、入口になるんですけども、1番目に「導入」と書いています。これはちょっとバージョンが古い平面図なんですけれども、「導入」というのは意味がわからないと識者評価で、ご指摘を受けましたので、このタイトルは変わる予定です。今考えているのは、「琵琶湖の物語の始まり」というような形で始めようとしています。

ここでは、「現在の琵琶湖の風景」、地形とか自然環境がわかるような風景を紹介しながら、その風景の中にある過去ということで、化石林であるとか、地層の剥ぎ取り標本であるとか、化石というものを少し紹介して、現在見えている風景の中に、そういう過去が残されていますよというようなことを導入シーンにしようとしています。

そこから進んでいくと、現在の展示があるんですけども、「山をつくる岩石」、そういったものが今の風景をつくっていますよというようなことで展示をしています。

A展示室、幾つか、現在展示しているものも残します。それは人気のところであったり、リニューアル後も意味を持つ展示ということで、残すところは残して活用して、新しい展示をつくるというようなことで、岩石のところはその1つということです。

今は、入って、ずっと真っすぐ回って、ぐるっと壁沿いをつたって、最後真ん中を見て、出ていくというようなコースになっているんですけども、新しい展示では、入ったところからいきなり真ん中に導入していくというような形になっています。そこからそれぞれのコーナーというような形です。

入って、現在の琵琶湖ということを紹介した後、真ん中へ誘導して、その床面には、現在の地図の中にある昔の琵琶湖はどこにあったのかということで、昔の琵琶湖は現在

の琵琶湖よりもだんだん南のほうへ移動していくことになりますので、現在の琵琶湖から、北のほうから南のほうへ歩いていくことによって、過去へさかのぼっていくというようなイメージで紹介します。

そして真ん中のところ、「琵琶湖と生き物のものがたり」というところで、どんなふうに調査をしたら、過去のことかわかるのかということのイメージとして、足跡化石を床の下に埋め込んだもの、そういった化石はどういう調査をしているのかということを実験中のところで紹介して、フィールドとのつながりというのを意識していただくということです。

先ほどから、自然環境の変化というようなことを言っているんですけども、新しい展示室では、自然環境の変化というものを、大地の変化ということで「変わる大地と湖」、生き物の変化ということで「変わる生き物」、そして気候の変化ということで「変わる気候と森」という、そういう自然環境の変化というのを3つに分けて、それぞれのコーナーで紹介します。

「変わる大地と湖」に関しては、現在の琵琶湖がどうやってできてきたのかということ、地層とか、断層の剥ぎ取りであるとか、そういった大地の変化がわかるような標本を展示することで、詳しく紹介していきます。

次のコーナーは、「変わる生き物」のコーナーで、ここでは滋賀の地域であるとか、古琵琶湖で出てきた化石を中心に紹介するとともに、最近では現在の生き物のDNAの研究から、過去のことを探るといったような研究がされています。琵琶湖博物館にもそういう学芸員がいますので、そういった研究の成果も、こちらのコーナーで紹介します。

最後のコーナーは、「変わる気候と森」のところ、気候の変化というのは、過去の「植物化石」であるとか、植物を示す「花粉化石」というようなことから、気候の変化というのが読み取れますので、過去の滋賀県あたりの気候がどんなものであったのかというようなことと、植物の化石からどんな森林が広がっていったのかということと、それらの変化を紹介することで、それぞれの3つの自然環境の変化をそれぞれのコーナーで紹介するということになっています。

最後は、そういった琵琶湖と琵琶湖を含む自然環境の変化、それが400万年間かけて、どんなふうに変ってきたのかというまとめを、最後の「むすび」というところで紹介するんですけども、ここは映像とパネルで紹介することになると思います。

この「むすび」では、現在のA展示室でも、奥でやっているんですけども、地域の人々が鉱物とか化石とか、いろんな自然のものを調査したり、採取したりというふう楽しんでおられる方がいますので、そういった人と協働して、「地域の人々による展示」

というコーナーを設けて、今後も新しい展示をつくって、そこのケースで人々の活動を紹介していきたい。

そういった博物館の学芸員ではなくて、地域の人々がそういった地域を見直すような活動をやっていますよということを提示することによって、一般のほかの方々に、自分たちも地域を見直せるんじゃないか、自分たちも何かできるんじゃないかというようなことを促すきっかけになるんじゃないかなと考えています。

そこで出口に行って、次のB展示室につなげるということで、A展示室は終わるということなんです。

じゃ、引き続いて、B展示室の紹介に移りたいと思います。

○事務局：それでは、続きまして、B展示室の紹介をさせていただきたいと思います。B展示室を担当しております橋本と申します。よろしくお願いいたします。

資料はリニューアルの資料、資料3の4ページからになりますが、私も平面図を使いまして説明させていただきたいと思います。

平面図は一番最後のA3の図面になってございます。

まず最初にお断わりでございますけれども、今回の実施設計に当たりまして、琵琶湖博物館のリニューアルの基本計画で一旦考えておりました計画を、大きく変更することとさせていただきました。

その理由といたしましては、この4年間における研究の進展、それから実際に展示を制作するメンバーの更新ということがございます。

まず、図面をごらんいただきたいんですけども、今現在、B展示室の中央にございます丸子船でございまして、これを大きく右側のほうに移設することとさせていただきました。センターの部分に「里ゾーン」といたしまして、近江の「村」を展示したいというふうに考えております。そして、全体のコンセプトといたしましては、この近江の「村」を中心に、自然と人間がどのようにかかわりを持ってきたのか。特に、人間が自然をいかに利用し尽くしてきたのかということを紹介したいと思っております。全体の左手側に「森ゾーン」、上手側に「水辺ゾーン」、右手側に「湖ゾーン」というふうに区別いたしまして、森、水辺、湖と人間がいかに関わってきたのかということを紹介する展示といたしたいと思っております。

では、個別に紹介をさせていただきますけれども、まず展示室の入口部分に、「導入展示」ということで、これも先ほどA展で紹介がありましたように実際には具体的な名前を入れる予定にしておりますけれども、「近江に棲む龍」ということで、巨大な、7メートルに及ぶ近江の龍のオブジェで来館者の方をお出迎えするというようにさせてい

ただきたいと思っております。これはペットボトルで制作した龍を造形物として、ここに展示するという計画でございまして、龍を通じて人間が自然をいかに理解していったのかということについて紹介させていただきたいと考えております。

そして、入っていただいて、そのまま左手側に進んでまいります。この部分につきましては、現在の展示と同様ということで考えております。

そして、次の展示は「栗津貝塚」の遺跡になりますが、これも現在の展示をそのまま利用するという予定になっております。この「栗津貝塚」の遺跡の展示を中心に、これから森、水辺、湖という形でどのように自然と関わってきたのかを紹介する予定にしております。

そして、真っすぐ「森ゾーン」に入っていきます。ここでは、「森にくらす」「森をひらく」「森をつくる」、そして「木器コレクション」ということで、森を人間がいかに利用し尽くしてきたのかということを紹介していきます。

最初の「森にくらす」の部分では、縄文時代の人たちがいかに自然を利用してきたのかということ、ドングリの体験展示などを通じまして、ドングリの仕分け展示の疑似体験などを使うことによりまして、紹介したいと思っております。

それから、「森をひらく」につきましては、森林資源をいかに利用してきたのかということ、ジオラマを使いまして紹介する予定になっております。

そして、「森をつくる」のコーナーでは、今度は一旦利用し尽くした森を、人間がいかに回復させようとするように努力したのかということを紹介したいと思っております。実際にどう木材を利用したのかということにつきましては、「木器コレクション」のところで紹介する予定になっております。

真っすぐ進みまして、次に、「水辺ゾーン」に入っていきます。この水辺ゾーンでは、「水辺をつかう」「水辺にすむ」「水辺でかせぐ」ということで、水辺をいかに利用してきたのか、その利用の拡大を紹介したいと思っております。また、「水辺をつかう」では、実際今、私たちがいる烏丸半島の遺跡で、「玉作り」が行われてきたわけですが、その「玉作り」について紹介する予定にしております。

それから、「水辺にすむ」というところでは、近江八幡の事例を紹介しながら、水辺をいかに開発していったのか、これもジオラマを使って紹介する予定にしております。

そして、最後、「水辺でかせぐ」のコーナーでありますけれども、ここでは原寸大の漁師さんのジオラマをつくりまして、漁師がいかに工夫を凝らして魚をとっていったのかということを紹介する予定にしております。その手前側で「漁具コレクション」ということで、先ほど紹介がありました国登録になりました有形民俗文化財である琵琶湖

の漁撈用具について紹介する予定にしております。

そして、続きまして、今度は「湖ゾーン」のほうに移ってまいりまして、この「湖ゾーン」では、「湖をとおる」「湖からみる」「湖をつかう」ということで、湖の利用の拡大を紹介する予定になっております。

「湖ゾーン」では、今度は丸子船、今現在は段差があつて、なかなか全体を触ることはできないのでありますけれども、全体を触れるような仕組みを、実際にスロープでお借りいただいて、船首から船尾まで触れるような展示にしたいと考えております。

なお、視聴覚障害者の方や、あるいは一般のお子さまたちにもわかりやすく船の構造を理解できるものとして、レリーフを展示する予定にもしております。

そして、中央部分でありますけれども、「里ゾーン」ということで、ここでは「村」の展示を予定しておりますけれども、最初に、「宮座」という行事の紹介をします。そして村の「お堂」を紹介して、村の人々がいかに結束を強めていったのかということについて紹介したいと思っております。さらに「村をまもる」、あるいは「自然をかいならす」というコーナーで、村がいかに強くなっていったのかということを紹介したいと思っております。

それから、最後、「むすび」で、これからの琵琶湖の利用について、過去から将来を見据えた議論をパネルで紹介して締めくくりとして、C展示室につなげるようにしたいと考えております。

なお、先ほど紹介し切れませんでしたけれども、展示の各所にフォトスポットを設けて、ご家族連れの方とかが楽しみながら展示を回れるようにしたいと考えておまして、なおかつ、できるだけ原寸大ジオラマをつくったりしまして、体感できる展示を目指しております。

また、コレクションにつきましても、「湖ゾーン」では、「船大工道具コレクション」を紹介する、それから「漁具コレクション」を紹介する、それから「木器コレクション」を紹介するというので、コレクションをふんだんに紹介するというので、実物資料を体感していただけるように考えております。

以上で、簡単ですが、B展示室の説明を終わらせていただきたいと思います。ありがとうございました。

○事務局：以上、A展示室、B展示室のリニューアルの概要でした。今回のリニューアルを終えることによって、いよいよグランドオープンとなります。

リニューアルによりまして、琵琶湖博物館は、「湖と人間」のあり方を県民とともに考え、また次代を担う人が育つ場となり、また地域活性の核ともなる、そういった博物

館を目指してまいります。

説明は以上でございます。よろしくお願いいたします。

○会長：ありがとうございます。

お配りしています資料4のほうに、今回、事前に館のほうからリニューアルについての意見を求める機会をつくられましたので、その内容について、皆さんからのご意見、ご質問と、それに対する回答がまとめられています。事前に見ていただいているかと思いますが、これでよければよいということですが、もしこれについてのご意見がありましたら、それも含めて出していただければというふうに思っております。

○委員：B展示室について、2点、もう少しご説明をいただきたいと思うんですが、まず質問表のところにも書きましたが、近江の龍というのは、一体何をイメージしているのか、もうひとつよくわからないというのが1つ。

それから、最後5-3のところ、「自然をかいならす」という言葉が出てきますが、「かいならす」というような意識がアジアの場合、自然を使う場合に、そういう意識があったのかどうかというところを、もう少し説明いただければというふうに思います。

○事務局：ご指摘ありがとうございました。

まず最初に、近江の龍につきましてでございますけれども、基本的な考え方といたしましては、人間が自然を理解するときに、前近代でございますので、科学というものがなかった時代に、どのように自然を理解していたのかというときに、龍王信仰、龍神信仰というのは、大きなキーワード、キーポイントになるのではないかと考えております。例えば、琵琶湖そのものは龍宮であったというような説話ですとか、これは桑実寺縁起でございますけれども、そうした説話ですとか、あるいは雨が降らないときには、山に登って龍神様にお祈りすると、雨が降るといような考え方ですとか、そういった考え方は県内各地にございまして、自然をコントロールしているのが、まさしく龍であるという、そういうふうな信仰を今回取り上げて、その龍を展示のナビゲーターとして、各展示室を回って行きます。

としますと、この展示は、人間が自然にいかに関与したのかという、一見、一方向的な展示のように見えるかもしれませんが、そこに龍というものが介在することによって、自然の側からも人間の活動を相対化してみるということが可能になるというふうに考えているところでございます。

それから、2点目の「自然をかいならす」ということでありますけれども、これは里という空間自体が、人間が手を加えてコントロールしていった空間ではないかどう考えておきまして、最も人間にとって都合のいい自然をつくり上げていく。そのときに例え

ば、牛というようなものは、人間がかいならして、そして里をつくることによって、水田を耕作することによって、人間にとって適合的な自然に、都合のよいというふうな言葉がいいかと思うんですけども、都合のよい自然に変えていくための手段としたということを考えておまして、「かいならす」というような表現をさせていただいておりますが、これは当時の人が自然をかいならしているというふうに考えていたかどうかというのは、これはまた別の議論でございますけれども、結果的に人間が都合のよい自然をつくっていったということを、このコーナーでは紹介したいと考えております。

以上でございます。

○会長：いかがでしょうか。

○委員：ちょっとしつこいようですが、ここに書かれている龍というと、どうしても中国のドラゴンのイメージがあるんですが、また違いますよね。これはどんな形ですか。何かペットボトルでおつくりになるということですけど。

○事務局：造形物としてはペットボトルで作りますけれども、実際には海北友松（かいほうゆうしょう）以来、日本固有の独特な龍の形というのもあると考えておまして、具体的には高田敬輔（たかだけいほ）が描いた龍をモデルとして、制作するというところを今考えているところでございます。

○会長：委員、関連ですか。

○委員：滋賀県に長く住んでいると、琵琶湖に龍がいるというのと、そして雨乞いで龍がいる、山の上にも龍が棲むというのは、割と感覚的にというか、何となく話などで覚えているんですけども、県外の方にしたら、水イコール龍という感覚はあまりないと思うんです。龍といっても、どちらかというと、水蛇（みずち）ですか。そういう感じの龍だと思っんです。

ここでの龍を案内してもらうには、伊吹山の山頂の神は龍の神だという話もあります。それは『古事記』に載っている話です。そして、途中の川なり、さっきも橋本さんが言われたように、雨乞いのたびに龍にお祈りします。そういうのがあっちこちの集落で伝わっています。そして、琵琶湖の淵にも龍宮の宮があって、そこは龍が祭神です。

そういう感覚で私たちは接していますけれども、県外の方にしたら、龍というのは本当に、中国のああいいうドラゴンを思われるから、唐突なんだと思うんです。この龍を設定している後ろに、そういう山・川・湖の龍の何かの説明とまではいきませんが、滋賀県にはこれだけいるんだよ的な展示が少しでも加われば、県外の方にも理解していただけるのではないかなと、私、この質問書を読ませていただいて、そうだよ、県外の人だったら、思わないよねと思いつつ、これを読ませていただいて、そういうふうには

考えています。特に、琵琶湖博物館ですから、琵琶湖のことが中心なんですけれども、滋賀県の水の集水域を考えたときに、せめて滋賀県最高峰である伊吹山で、伊吹の上には龍神がいるという、せめてそういうことだけでも載らないかなと思っています。

それと、ついでに申しますが、この展示室で実は、3番の「水辺ゾーン」なんかも、これはどっちかという、湖なんですよね。滋賀県は昔は、これだけ大きな琵琶湖を抱えていながら、田んぼに水がありませんでした。川辺の水がすごく多くて、あっちこっちでそういう記録が残っています。ですから、この「水辺ゾーン」に、川も入れていただけませんか。滋賀県の住人、特に村とかは、水辺に住んでいるだけじゃないんです。琵琶湖が見えないところに住んでいる人たちもいます。その人たちは川を水辺として生活してきています。さっき私、教員の話のところで言いましたが、「かわや」というのを「かわと」と言ったり、「かばた」と言ったりと。かわやというのも、川の水のところに小さい小屋を建てて、それをかわやと言ったりとか、そういうこともありますので、山と川の視点がちょっと抜けているなというふうに思いますので、そこら辺、よろしくをお願いします。

○会長：まず龍のほうですけども、よろしゅうございますでしょうか。

○委員：龍、もう一つあるんです、違う視点が。

あっちこちの湖で、化身が龍であるというのは幾つかありまして、私、これを見たときに、琵琶湖の化身は龍かなということを思ってしまいました。そんなものがあつたらいいし、なければ、ちょっと解説が必要ですよ。東北の田沢湖の化身は龍ですし、辰子の化身だということがありますので、その辺を誤解のないようにしてほしいなど。龍は実は、私にとっては中国じゃなくて、湖の化身なんですよ。

○委員：まさにおっしゃるとおりで、龍と言ってしまうと、どうしてもああいう麒麟と蛇と合体したような中国的なドラゴンを思ってしまうので、やはり少し解説なり、何なりが必要かと思うんですね。あの龍というのは、実際には気象現象ですよ。それをイメージ化したら、ああいう形態になったというだけで、やっぱり自然というものをどう捉えるかということから発想しないといけないんじゃないかと思います。

それから、これは歴史観の問題で、橋本さんと僕とは対立するのかもわかりませんが、我が国の場合は、古代より、神様のエリア（神域）と人間のエリア（人域）とを分けて暮らしてきたというのが基本的な考え方で、それを里、あるいは平野のところに一部自然を残すというのが鎮守の森という、そういう自然観だと思うんですね。だから、「自然をかいならす」と言うと、どうしても人間と自然が対立しているようなイメージを持ってしまうけれども、そういう対立するような意識というのは、日本にはあつたのかな

あとという感じがするんです。

○会長：ありがとうございます。

○委員：龍は気象だけではなくて、地形のこともあります。

○委員：そうですね。

○会長：実施設計に入っていますので、展示そのものを変えてしまうというのは難しいと思いますが、多分、今でしたら、解説の原稿の文章ぐらひは、まだいろいろと変えられるかと思しますので、今のご指摘、吸収できる部分は吸収していただければと思います。

○事務局：大変貴重なご意見を多々いただきまして、ありがとうございます。

まず龍の問題につきましてですけれども、近江が龍神信仰をたくさん残していて、龍の棲む国であったと言ってもいいぐらいの地域であるということについては、共通のご認識がいただけるのではないかと思います。

問題は、それを県外から来られた方、あるいは県内の方でも新しく移住されてきた方にも伝わるように、わかりやすく説明するという事ではないかと思ひまして、今見ていただいている平面図にも、実は龍神信仰について紹介するパネルを設置する場所が表示されているわけでありまして、今おっしゃっていただいたような内容につきましては、グラフィックパネルで紹介したいと。私たちがなぜ龍を取り上げるのかも含めて、グラフィックパネルで紹介したいと思っております。

それから、2つ目でございます。水辺というところでございますけれども、例えばこういう網漁というのは水辺の問題ではなくて、湖の問題ではないかというようなことですか、それから河川について取り上げていないのではないかというようなことにつきましてですけれども、これは私の完全な説明不足でございまして、今回の展示で私たちは、「水辺」という空間を広い概念として提示したい。琵琶湖地域を考える上で、「水辺」という環境が非常に重要なんだということを提示したいという思ひで、「水辺ゾーン」をつくっております、これは国土庁等の「琵琶湖総合保全」の報告書に掲載されている概念でございますけれども、水深7メートルぐらひのところから、標高が明治29年の大洪水のときの3メートル76センチぐらひまで、水辺というふうに広く捉えているということで、結果的にここを売りにしたいという思ひから、ほかの部分が後退している感は否めないかもしれませんが、この「水辺ゾーン」ということを今回の展示では中心的に押していきたいと考えているところではあります。

それから、3つ目に、「自然をかいならす」というところでございますけれども、今回の展示は歴史学だけではなくて、考古学、民俗学の学芸員と一緒に考えているところでございます、ちょっと突き詰めて、人がいかに自然を利用したのかということに

特化して展示をつくっているのですが、委員がお考えになっているのとは、少し、少しというか、だいぶかもしれませんが、考えが違っているところがあるかもしれませんが、私たちはその問題については、ここもまた龍頼みななのでありますけれども、各コーナーに龍を登場させて、龍のコメントを入れることによって、その龍が人間の行き過ぎですとか、思い違いですとか、あるいは傲慢さみたいなものに茶々を入れていくというような形で展示をつくりたいと思っております、人間はかいならしていると思っているかもしれないけれども、実際には人間が利用されているというような側面も含めて、展示を構成したいと考えているところであります。

とりあえず、以上で一旦回答を終了したいと思います。

○会長：ご説明ありがとうございました。

委員。

○委員：ものすごく子どもっぽい質問というか、A展示室の「マチカネワニ」、本当に全身復元模型をつくれるのでしょうか。

○事務局：A展示室の「マチカネワニ」と書いているところは、大山田湖の時代の一番初めの湖ができた当時のところで、「マチカネワニ」と考えられる化石が出てくるんですけども、足跡とか、出てくる化石から復元すると、その「マチカネワニ」に関しては、体長が2メートルぐらいなんです。だから、その大きさを復元します。

○委員：残念。

○事務局：すみません。

確かに、大阪に出ているやつは、2015年の企画展示で、こちらでも展示させていただいたんですけども、ものすごい迫力で、みんなのイメージはあれだと思うんですけども、学術的に、古琵琶湖の時代にいた「マチカネワニ」に関しては、どうも小さいやつばかりなので、その大きさを復元するというようなことです。

○委員：単純に、こんなワニがいたという、体の前の部分だけの復元はニフレルにあるんですよ。全身となると、ものすごいお金がかかると思うので、琵琶湖博物館でようおやりになるなあというのと、私、それだけ見に行きたいなあというのがあって、2メートルなら来ません。すみません。

○会長：委員、どうぞ。

○委員：A展示室の入口に入ってすぐの古琵琶湖のことなんですけども、いつも古琵琶湖で移動するというのを、大山田湖あたりからずっと動いた、その地図は、琵琶湖博物館で以前から展示されていたんですが、そのときに日本全体の形はどうだったかなというのが、ちょっと私、自分の中でつながってなくて、古琵琶湖が動き出したとか、でき

たあたりの日本と大陸とのつながりの、そういう形が見えたら、わかりやすいかなと。
ほかの方にも、地殻移動とかで随分変わっていますよね、こっちのほうも。

○委員：それは難しい。

○委員：難しいですか。

○事務局：ありがとうございます。

おっしゃるとおりだと思いますけれども、言われたとおり、難しいですよ。

実は、ちょっと関係ない話ですけども、今度の土曜日に東京の日本橋で、琵琶湖の話をしないといけなくなったんですけども、東京の人だから、琵琶湖の話だけじゃなくて、もうちょっと広い範囲で、日本列島のとかと考えると、図を描き始めたんですけども、これは無理だなと。今の研究のレベルでは無理です。だから、例えば関西のあたりだけとか、もうちょっと広げて伊勢湾ぐらまでとかだったら、描けるんですけど、ただ日本海側はどの辺に海岸線があったとかというようなこともわからないですし、すごく曖昧な図になってしまうので、なかなか難しいなというところです。

○委員：点線でも結構です。

○委員：その点線が描けないんですよ。

○委員：点線も描けない。専門家の方は、確かに正確にしなきゃと思うでしょうけど、私たちが普通、ぱっと見たときに、じゃ、このところ、日本の形はどうやってつながっていたんだろうというのを、昔の教科書で見た覚えはあるんですけども、できたら、少しでも載っていたらいいなと思いました。

○事務局：大陸とのつながりに関しては、情報が少な過ぎて描けないんですけども、「変わる大地と湖」のところで、水系を扱うつもりでいますので、古琵琶湖の時代に、一番初めは伊勢湾方向に流れていて、当時の東海湖とつながっていたとか、大阪平野のほうに流れ始めたのはいつかというような、そういう図は描くつもりですので、申しわけないですけども、そのあたりでご勘弁ください。

○委員：ぜひお願いします。

○委員：もし言われていることがわかっていたら、大陸から日本へどんな動物が来たかという、動物相もわかってしまうんですよ。それがわからないんです。知りたいですけどね。

○会長：よろしいですか。

○委員：知りたいですね。

○会長：では、ほかの方。

お願いします。

○委員：こちらの意見を先に書かせていただいたのを、今ご質問させていただいてもよろしいですか。

○会長：はい、どうぞ。

○委員：1つは、B展示室でICT活用というふうに書かれていて、15番は私が書いたんですけども、前にそれを使っていたら、自分のスマホの充電が切れてしまって、全然使えなくなったという経験があって、例えばそういうフォローをしていただけるのかなという、単純な質問です。

それと、先ほどのご説明で、大幅に展示の中身が変わりましたというふうにお伺いしたんですが、「殺生をめぐる葛藤」というコーナーができるというのは、私はちょっとドキっとして、こういう自然の博物館でそういうことをされるというのは、とても興味がありました。しかし、それがなくなったという経緯を詳しく伺いたいと思います。

それと3つ目ですが、今、龍の話がいろいろ出てきたんですが、架空のものを扱うというのは、いろんなことで難しいんだなというのを、今伺っていて思ったんですが、でも私なんかは何も知らないんで、伝説の話を知っていると、その当時の人の心の中がちょっと垣間見られたり、その中から自然の風景が見られたりということがあって、私はすごくおもしろいテーマだなと思っています。

ずっと以前、ものすごく昔なんですけど、遠野のほうの博物館で、柱のところに椅子があって、そこにもたれると、スピーカーから伝説が流れてくるというのがあって、私はひたすら、柱ごとに座って、聞いて楽しんだんですが、伝説は伝説として、そういうコーナーがちょっとあると、そこから入ってこれる人たちもいるので、私はあってほしいなと思っています。

○会長：ありがとうございます。

3つ目はどこの博物館ですか。

○委員：遠野です。

○会長：遠野。岩手県ですね。そういうアイデアもまたご参考にいただければと思います。

○事務局：ありがとうございました。

まず、ICTの活用につきましてですけれども、これは今現在、検討中ではございますが、個人のスマホと同時に、タブレット端末を設置して、そちらでもごらんいただけるように。スマホですと、アプリをダウンロードしてとかということになりますと、ご高齢の方とかはハードルが高くなるかと思いますが、スマホでももちろん利用できますけれども、タブレットの端末でも利用できるような形を今検討しておりまして、

そうした複数のやり方を備えておきますと、こちらがだめな場合には、こちらを利用していただくということが可能になるのではないかと考えております。

それから、2つ目の殺生禁断のお話でございますけれども、これは私も個人的には非常に残念なんですけれども、今回の展示をどういうふうに再編成していこうかということを考える中で、人間の心の持ちようというよりも、いかに人間が自然を利用し尽くそうとしてきたのかというようなことにターゲットを置いていこうというふうになりました。考え方を変えまして、それで、今日お示したような実施設計の素案になっているということでございます。

それから、3つ目の伝説につきましては、これは先ほども言いましたように、龍の伝説とか、説話とか、伝承とかが県内各地に残っておりますので、それをわかりやすく皆様に紹介するような方向で、これからも検討していきたいと考えております。ありがとうございました。

○会長：よろしいですか。

ほかにいかがでしょうか。

お願いします。

○委員：たびたびすみません。

B展示室の真ん中の「村」のところで、5-1の「人をむすぶ」の宮座八人衆というのがちょっとわかってないんです。県内の各地で、東と西とでも風習が違いますし、宮座八人衆だけで説明がないので、ちょっと私はわからないということと、5-2で「村をまもる」があります。虫送りと野神があつて、もう一つ未定になっていて、たしかこっちは勧請縄（かんじょうなわ）がどうのと書かれていたんですが、お祭りの視点が抜けていませんか。滋賀県内、独特なお祭りがあります。まして伊吹の太鼓踊りとか、東近江のケンケト祭り系なんか、すごい珍しいし、変わっていると思うんですが、村の行事となったら、お祭りというのは外せないと思うんです。そこら辺を入れられないかなと、この図を見て考えました。よろしくをお願いします。

○事務局：ありがとうございます。

まず、宮座八人衆のところでございますけれども、これは実は特定の集落、村を取り上げる予定にしておりますが、まだそれが周知できる段階にはございませんので、図面では反映されていないということでございまして、ある特定の集落の宮座行事について、まるでそれを体感しているかのような、疑似体験ができるような形で展示したいというふうに考えております。

続きまして、お祭りの件でございまして、これはおっしゃるとおり、現在のB展示室

でも建部大社の船幸祭ですとか、日吉大社の山王祭ですとか、紹介するコーナーがございます。それを今回、更新するというところでございますけれども、実は、この「村をまもる」のコーナーを検討する中で、それについて紹介する方向で今検討を進めている段階でございます。きょうの図面ではちょっとそれがまだ反映できていないということでございます。もちろん、私も若いころから、村の祭りは毎年見に行ってますので、関心はあるんですけども、現状ではそうなっているということでご理解いただければなと思います。

○委員：じゃ、宮座のところも、県内にはいろんな形のものがあるという説明的なもの、ここだけではないよという感じの説明文があればいいなと。写真つきでもいいから、そういうことを思うんですけど。

○事務局：ありがとうございます。

当然、バラエティーに富んでいるということについては、専門家もおりますので、理解をしているところでございまして、そのバラエティーに富んだ中で、今回は特定のここを紹介しようという形で説明させていただきたいと思っております。

○会長：ほかにいかがでしょうか。

B展示室の出口のところ、次のC展示室につないでいくというふうにおっしゃっていましたが、B展示室とC展示室は随分離れています。そこをどういうふうにつないでいくかというところをちょっとお聞かせいただければというふうに思います。

○事務局：ありがとうございます。

距離的な問題ではなくて、展示の中身でどうつなげるかというふうに理解させていただきましたけれども、C展示室は現在を展示しているのに対しまして、B展示室は現在の一步手前の近代までを展示するという形になります。今のこの展示が、こう現在につながっているんですよということを学芸員がそれぞれの研究を紹介する中で語りたいたと。語りたいたといいますか、訴えたいというふうに思っています。この展示室は中心的には、考古学、民俗学、歴史学の研究者がつくるわけでございますけれども、その研究者それぞれの視点に基づいて、この展示は実は今現在のこういうことにつながっているんですよとか、あるいはこれから未来を考える上で、こういうところを大事にしてください、見ていただきたいですというようなこと。これはこれから検討するところでございますけれども、そういった形で次のC展示室に伝えていきたいと考えております。

○会長：ぜひ出口のところに、次、C展示室に行ってみたくなるようなメッセージを出していただきたいと思います。

○委員：今のお話に関連しているんですけど、あえて最初に龍が出てきて、自分たちが

人間として、最初は自然の中でいろんな恵みを得ながら暮らしてきたのが、恐らく展示室の中でだんだん関係性が変わってきて、人間自身の力がどんどん強くなっていく、人間の結びつきも強くなっていく中で、最後の最後に、周りの自然と人間の感覚が逆転する。自然をかいならしていき、あるいは自然を取り込んでいこうという話が出てきたときに、龍が何をメッセージとして発するのかというのがすごく興味があって、その意識づけでやっぱりC展示室の捉え方は全然変わってくると思いますし、やっぱり今を生きている人たちが過去の暮らしを引き継ぎながら、どう生きていくのかということを考えていく上で、ここの展示室の最後のメッセージというのはすごく大事なものになる気がするので、ぜひC展示室に対しての促しもそうですし、今、自分たちが滋賀で暮らすということの特徴だったり、課題だったりを考えられるようなメッセージを、龍を使っているからこそできるようなメッセージを発していただきたいなと思います。

○会長：よろしくをお願いします。

○事務局：ありがとうございます。

大変大きな期待をいただきまして、恐縮するところでございまして、多分、もう原稿の締め切りの一番最後の最後の段階で、苦悩しながら考えることになると思うんですが、おっしゃっていただいたように、B展示室はこれでおしまいという展示ではなくて、ここから今につながって、そして未来へ行こうというところの始まりの展示室でございますので、ご指摘いただいたような点を踏まえて、苦悩しながら考えたいと思っております。

(4) その他

○会長：時間もそろそろなくなってきましたので、あと、お一つぐらいありましたら、受けたいと思いますが、いかがでしょうか。

よろしいですか。

お願いします。

○委員：4番のその他のところで。

○会長：その他で。

○委員：私、この協議会に何度か出ておりますけれども、内容がほとんど展示とリニューアルに関する内容に終始したかと思うんですが、協議会としてもう一つ重要な、防災についてどうお考えなのかということ、ちょっとお聞かせいただきたいと思うんです。それは何かというと、日本全国で揺れておりますし、いろんな災害が起こっております。そういう中で、資料保存をどうやっていくのかというのが、展示よりもより重要な博物

館の機能の一つだというふうに、私としては考えておりました、その辺、どこまで進んでいるのか。

例えば、館単独での防災、資料保存の問題、あるいは滋賀県全体の資料保存の問題、全体と言いますと、ちょっと語弊がありますけれども、こちらで専門にされております分野の資料が県下全域に広がっていると。琵琶博がやっぱり中心になって、その保存を考えていくということが大事かなあという気がいたします。

私、実は阪神淡路大震災のときに、琵琶湖文化館のほうで学芸員をしておりました、そのときに体制としてはなかったんですけれども、文化庁主催の取り扱い講習での西日本の同僚たちで、資料をどう保存していくのかということの緊急集會みたいなものがございました。そのとき、琵琶湖文化館の取り上げた態度というのは、そのときの館長の英断で、展覧期間中でも、必要があれば展示スペースを閉めてよろしいというご許可を頂戴した記憶がございます。

今、全国で、そういう震災に対して博物館がどういう機能を展開するかということが、ちょっとないがしろにされているような気がいたしますので、時間もありませんので、もし機会がありましたら、次回、そういうことをちょっとお聞かせいただければというふうに、問題の投げかけで終わらせていただきたいと思います。

○会長：重要なお指摘、ありがとうございます。

今後の議題設定の中に組み込んでいくことも検討いただきたいというふうに思います。ほかに、その他、いかがでしょうか。

よろしいですか。

それでは、これで一応討議のほうはおしまいにしたいと思います。

できたら、リニューアルオープンの際のイベントに、龍のシンポジウムでもやっていただければいいんじゃないかと思います。

3 閉 会

○司会（副館長）：山西会長並びに委員の皆様方には、長時間にわたりまして、熱心にご議論いただきまして、ありがとうございます。

本日は大変貴重な意見もいただきましたので、私どもで検討させていただきまして、今後の博物館運営、あるいはリニューアルに活かしてまいりたいと考えております。

次回の会議につきましては、31年、本年の9月ごろを予定しております。後日、日程調整をさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

〔15時15分 閉会〕